

⑨療法

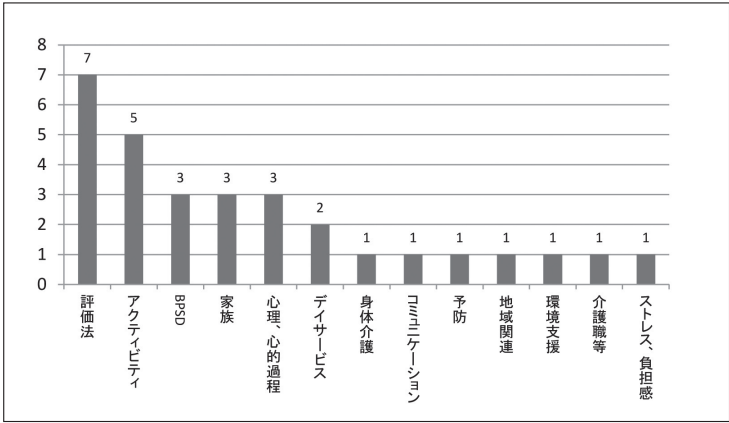
⑨-1 他の研究内容との重複

療法に関連する研究52件のうち重複している研究内容では、「評価法」の研究が最も多く7件(13.5%)となっており、次いで「アクティビティ」に関連する研究が5件(9.6%)となっている。さらに、「BPSD」、「家族」、「心理、心的過程」がそれぞれ3件(5.8%)となっている。

表⑨-1 他の研究内容との重複件数 (N=52)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
評価法	7	13.50%
アクティビティ	5	9.60%
BPSD	3	5.80%
家族	3	5.80%
心理、心的過程	3	5.80%
デイサービス	2	3.80%
身体介護	1	1.90%
コミュニケーション	1	1.90%
予防	1	1.90%
地域関連	1	1.90%
環境支援	1	1.90%
介護職等	1	1.90%
ストレス、負担感	1	1.90%

図⑨-1 他の研究内容との重複状況 (N=52)



⑨-2 研究方法の傾向

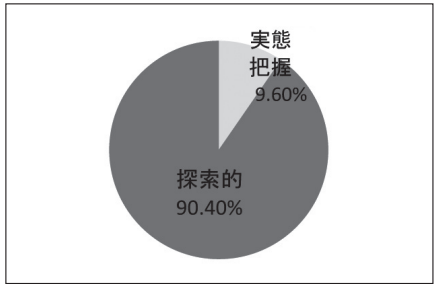
⑨-2-1 研究タイプ1の傾向

療法に関する研究52件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「探索的研究」が47件(90.4%)であり全体の9割を占めている。また「実態把握研究」は5件(9.6%)であった。療法に関する研究タイプは「探索的研究」が圧倒的に多いことがうかがえる。

表⑨-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	5	9.60%
探索的	47	90.40%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	52	100.00%

図⑨-2 研究方法の傾向



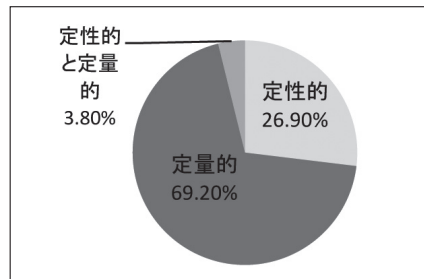
⑨-2-2 研究タイプ2の傾向

療法に関する研究52件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が36件(69.2%)であり全体の7割近くになっている。次いで「定性的研究」が14件(26.9%)となっており、「定性的と定量的研究」は2件(3.8%)であった。

表⑨-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	14	26.90%
定量的	36	69.20%
定性的と定量的	2	3.80%
合計	52	100.00%

図⑨-2-2 研究タイプ2



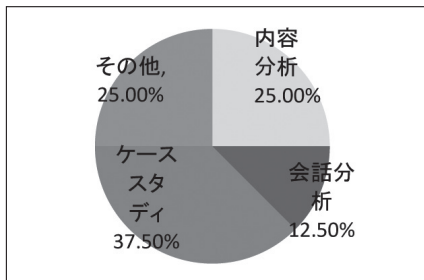
⑨-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の16件のうち、その研究種類は「ケーススタディ」が6件(37.5%)で最も多く、次いで「内容分析」、「その他」がともに4件(25.0%)、「会話分析」が2件(12.5%)となっている。

表⑨-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	4	25.00%
会話分析	2	12.50%
エスノメソドロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	0	0.00%
ケーススタディ	6	37.50%
その他	4	25.00%
合計	16	100.00%

図⑨-2-3 定性的研究の種類



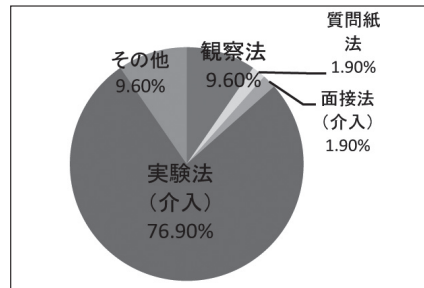
⑨-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、「実験法(介入)」が最も多く40件で76.9%であり、全体の3/4以上を占めている。次いで「観察法」、「その他」がともに5件(9.6%)、「面接法」、「質問紙法」がともに1件(1.9%)となっている。

表⑨-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	5	9.60%
面接法	1	1.90%
質問紙法	1	1.90%
実験法(介入)	40	76.90%
その他	5	9.60%
観察法と面接法	0	0.00%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	52	100.00%

図⑨-2-4 研究方法



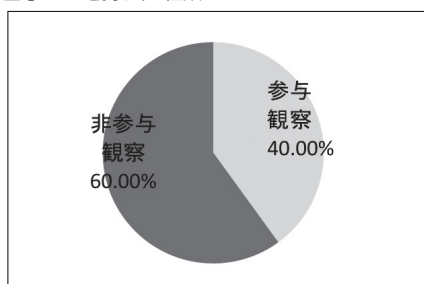
⑨-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、記載のあった研究5件のうち最も多いのは「非参与観察」であり3件(60.0%)ある。「参与観察」は2件であり40.0%である。

表⑨-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	2	40.00%
非参与観察	3	60.00%
その他	0	0.00%
合計	5	100.00%

図⑨-2-5 観察法の種類



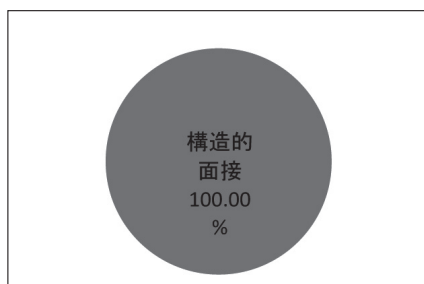
⑨-2-6 面接法の種類

面接法の種類について、面接法は1件のみであり、その種類は「構造的面接」であった。

表⑨-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	1	100.00%
半構造的面接	0	0.00%
グループインタビュー	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	1	100.00%

図⑨-2-6 面接法の種類



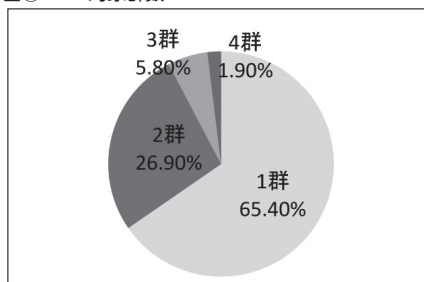
⑨-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」であり34件(65.4%)であり、次いで「2群」が高く、14件(26.9%)であった。さらに「3群」が3件(5.8%)、「4群」が1件(1.9%)であった。

表⑨-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	34	65.40%
2群	14	26.90%
3群	3	5.80%
4群	1	1.90%
合計	52	100.00%

図⑨-2-7 対象群数



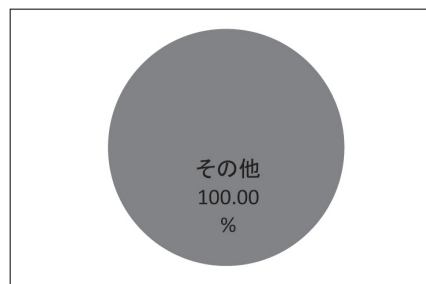
⑨-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、52件の中で「全国対象」は全くなく、「その他」のみであった。

表⑨-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	0	0.00%
その他	52	100.00%
合計	52	100.00%

図⑨-2-8 対象範囲



⑨-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

療法の研究において、実施期間の平均は31件中133.39日であり、研究地域数の平均は37件中1.16地域であった。事業所数の平均は36件中1.14事業所であり、対象者人数の平均は52件中37.52人であった。

表⑨-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間 (日)	31	1	1140	133.39	209.181
研究地域数	37	1	4	1.16	0.602
事業所数	36	1	4	1.14	0.593
対象者人数 (人)	52	1	795	37.52	111.561

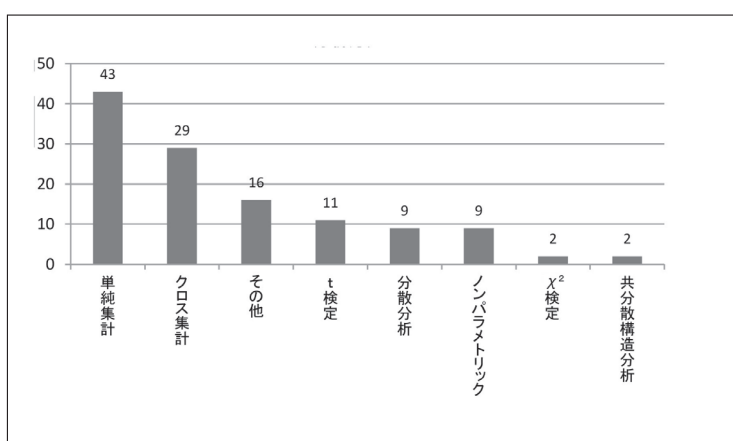
⑨-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が最も多く43件であり、82.7%であった。次いで「クロス集計」が29件、55.8%であり、さらに「その他」が16件で30.8%、「t検定」が11件で21.2%、「分散分析」、「ノンパラメトリック」がともに9件で17.3%と続いている。

表⑨-2-10 分析方法の件数 (N=52)

分析方法分類	件数	重複割合 (%)
単純集計	43	82.70%
クロス集計	29	55.80%
その他	16	30.80%
t検定	11	21.20%
分散分析	9	17.30%
ノンパラメトリック	9	17.30%
χ^2 検定	2	3.80%
共分散構造分析	2	3.80%

図⑨-2-10 分析方法の件数 (N=52)



⑨ - 3 対象者属性の傾向

⑨ - 3 - 1 平均年齢

対象者属性の傾向として、記載のあった研究60件のうち平均年齢は79.716歳であり、標準偏差は7.5421歳である。最大値は93.0歳、最小値は48.7歳となっている。

表⑨ - 3 - 1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
療法	79.716	60	7.5421	48.7	93.0

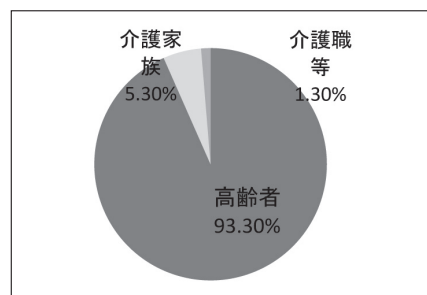
⑨ - 3 - 2 対象者属性の傾向

対象者属性について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く70件(93.3%)となっており、ほとんどが高齢者を対象者としている。次いで、「介護家族」が4件(5.3%)、「介護職等」が1件(1.3%)であった。

表⑨ - 3 - 2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	70	4	1	0	0	75
割合	93.30%	5.30%	1.30%	0.00%	0.00%	100.00%

図⑨ - 3 - 2 対象者属性



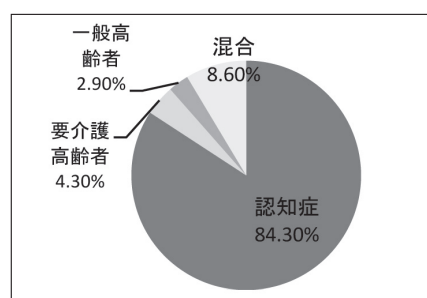
⑨ - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者の70件の中で、その内訳は、「認知症」が最も多く59件(84.3%)であり多くの高齢者属性が認知症である。次いで「混合」が6件で8.6%、さらに「要介護高齢者」が3件(4.3%)、「一般高齢者」が2件(2.9%)であった。

表⑨ - 3 - 3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	59	3	2	6	70
割合	84.30%	4.30%	2.90%	8.60%	100.00%

図⑨ - 3 - 3 高齢者属性



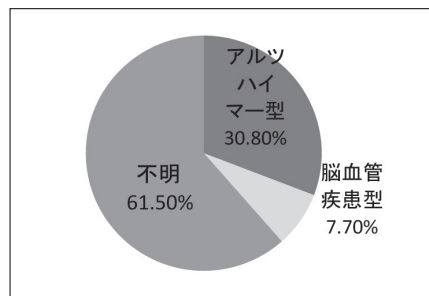
⑨-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類について、「不明」が40件、61.5%であり、「アルツハイマー型」が20件(30.8%)であり、「脳血管疾患型」は5件(7.7%)であった。

表⑨-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	20	5	0	0	40	0	65
割合	30.80%	7.70%	0.00%	0.00%	61.50%	0.00%	100.00%

図⑨-3-4 認知症種類



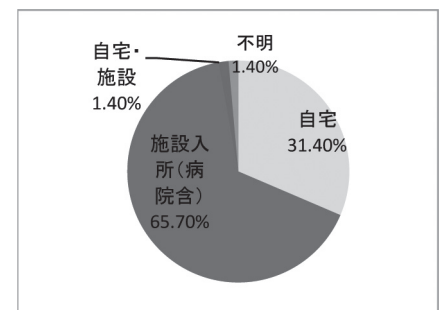
⑨-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が46件であり、65.7%となっており、2/3近くが「施設入所(病院含)」である。次いで「自宅」が22件(31.4%)であり、「自宅・施設」、「不明」がともに1件で1.4%であった。

表⑨-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	22	46	0	1	1	70
割合	31.40%	65.70%	0.00%	1.40%	1.40%	100.00%

図⑨-3-5 所在



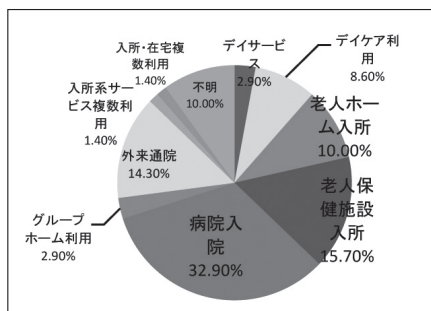
⑨-3-6 利用サービスの傾向

療法においての利用サービスについての傾向は、「病院入院」が23件であり、32.9%であった。次いで「老人保健施設」が11件(15.7%)、「外来通院」が10件(14.3%)、「老人ホーム」が7件(10.0%)であった。

表⑨-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院	
件数	0	0	2	6	7	11	23	
割合	0.00%	0.00%	2.90%	8.60%	10.00%	15.70%	32.90%	
	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス 複数利用	在宅系サービス 複数利用	入所・在宅系サ ービス複数利用	不明	合計
	2	0	10	1	0	1	7	70
	2.90%	0.00%	14.30%	1.40%	0.00%	1.40%	10.00%	100.00%

図⑨-3-6 利用サービス



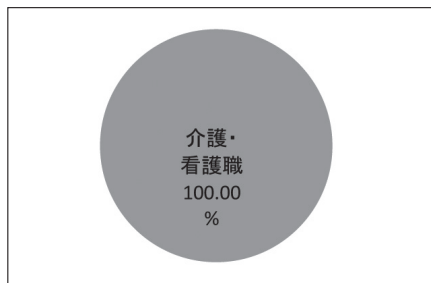
⑨-3-7 職員種別の傾向

職員種別について記載のあった研究は「介護・看護職」のみで1件であり、他の記載はなかった。

表⑨-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	0	0	0	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	介護・看護職	複数職種	合計				
件数	1	0	1				
割合	100.00%	0.00%	100.00%				

図⑨-3-7 職員種別



⑩ アクティビティ

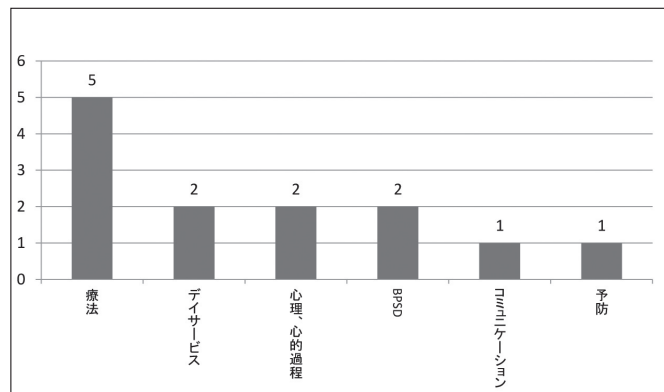
⑩-1 他の研究内容との重複

アクティビティに関連する研究22件のうち重複している研究内容では、「療法」の研究が最も多く、5件(22.7%)となっており、次いで「BPSD」、「デイサービス」、「心理、心的過程」に関連する研究がそれぞれ2件(9.1%)となっている。さらに、「コミュニケーション」、「予防」がそれぞれ1件(4.5%)となっている。

表⑩-1 他の研究内容との重複件数 (N=22)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
療法	5	22.70%
デイサービス	2	9.10%
心理、心的過程	2	9.10%
BPSD	2	9.10%
コミュニケーション	1	4.50%
予防	1	4.50%

図⑩-1 他の研究内容との重複状況 (N=22)



⑩-2 研究方法の傾向

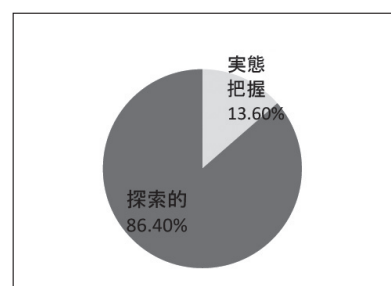
⑩-2-1 研究タイプ1の傾向

アクティビティに関する研究22件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「探索的研究」が19件(86.4%)であり、全体の8割を超えている。また「実態把握研究」は3件(13.60%)であった。アクティビティに関する研究タイプは「探索的研究」が多いことがうかがえる。

表⑩-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	3	13.60%
探索的	19	86.40%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	22	100.00%

図⑩-2-1 研究タイプ1



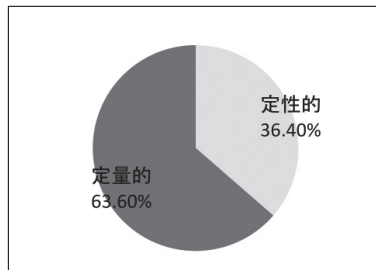
⑩ - 2 - 2 研究タイプ 2 の傾向

アクティビティに関する研究22件における研究タイプ 2 別の件数及び比率は、「定量的研究」が14件(63.6%)であり、全体の 6 割を超えている。次いで「定性的研究」が 8 件(36.4%)となっており、「定性的と定量的研究」はなかった。

表⑩ -2-2 研究タイプ 2

	件数	割合
定性的	8	36.40%
定量的	14	63.60%
定性的と定量的	0	0.00%
合計	22	100.00%

図⑩ -2-2研究タイプ2



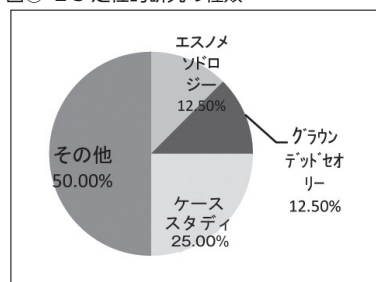
⑩ - 2 - 3 定性的研究の種類

定性的研究の 8 件のうち、その研究種類は「その他」が 4 件(50.0%)で最も多く、次いで「ケーススタディ」が 2 件(25.0%)、「エスノメソドロジー」、「グラウンデッドセオリー」がともに 1 件(12.5%)となっている。

表⑩ -2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	0	0.00%
会話分析	0	0.00%
エスノメソドロジー	1	12.50%
グラウンデッドセオリー	1	12.50%
ケーススタディ	2	25.00%
その他	4	50.00%
合計	8	100.00%

図⑩ -2-3 定性的研究の種類



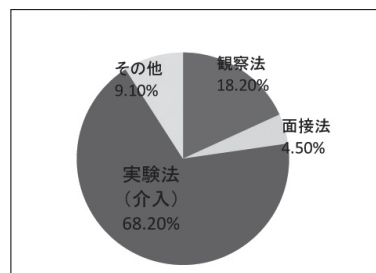
⑩ - 2 - 4 研究方法の傾向

研究方法において、「実験法(介入)」が最も多く15件で68.2%であり、全体の 7 割近くを占めている。次いで「観察法」4 件(18.2%)、「その他」が 2 件(9.1%)、「面接法」が 1 件、4.5%となっている。

表⑩ -2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	4	18.20%
面接法	1	4.50%
質問紙法	0	0.00%
実験法(介入)	15	68.20%
その他	2	9.10%
観察法と面接法	0	0.00%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	22	100.00%

図⑩ -2-4 研究方法



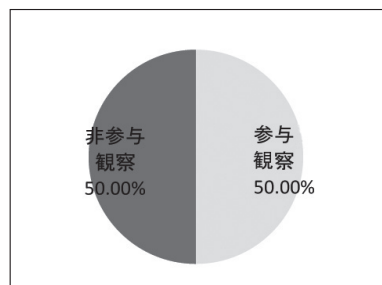
⑩-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、観察法4件のうち「参与観察」、「非参与観察」とともに2件(50.0%)ある。

表⑩-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	2	50.00%
非参与観察	2	50.00%
その他	0	0.00%
合計	4	100.00%

図⑩-2-5 観察法の種類



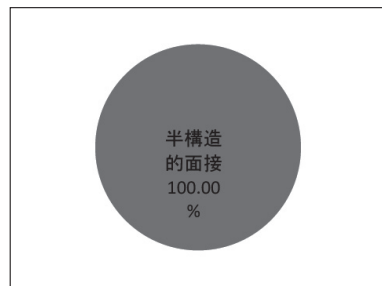
⑩-2-6 面接法の種類

面接法の種類について、面接法は1件のみであり、その種類は「半構造的面接」であった。

表⑩-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	0	0.00%
半構造的面接	1	100.00%
グループインタビュー	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	1	100.00%

図⑩-2-6 面接法の種類



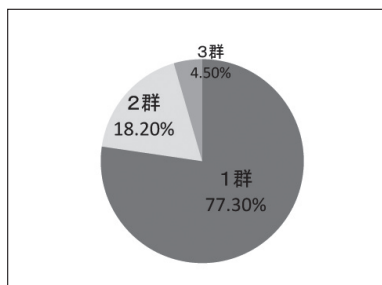
⑩-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」で17件(77.3%)であり、次いで「2群」が高く、4件(18.2%)であった。さらに「3群」が1件(4.5%)であった。

表⑩-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	17	77.30%
2群	4	18.20%
3群	1	4.50%
4群	0	0.00%
合計	22	100.00%

図⑩-2-7 対象群数



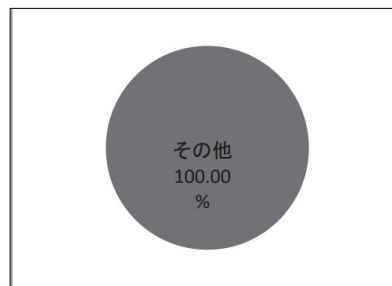
⑩-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、22件の中で「全国対象」は全くなく、「その他」のみであった。

表⑩-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	0	0.00%
その他	22	100.00%
合計	22	100.00%

図⑩-2-8 対象範囲



⑩-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

アクティビティの研究において、実施期間の平均は14件中113.07日であり、研究地域数の平均は17件中1.18地域であった。事業所数の平均は18件中1.33事業所であり、対象者人数の平均は22件中25.91人であった。

表⑩-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間（日）	14	1	360	113.07	114.603
研究地域数	17	1	4	1.18	0.728
事業所数	18	1	4	1.33	0.97
対象者人数（人）	22	1	140	25.91	32.801

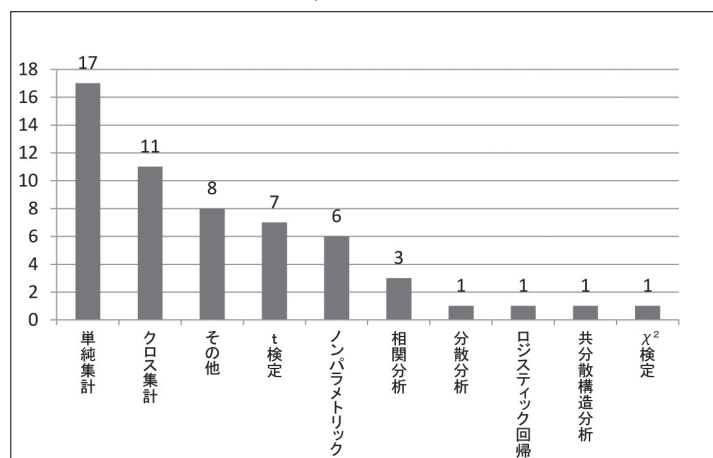
⑩-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が最も多く17件であり、77.3%であった。次いで「クロス集計」が11件、50.0%であり、さらに「その他」が8件で36.4%、「t検定」が7件で31.8%、「ノンパラメトリック」が6件で27.3%と続いている。

表⑩-2-10 分析方法の件数（N=22）

分析方法分類	件数	重複割合 (%)
単純集計	17	77.30%
クロス集計	11	50.00%
その他	8	36.40%
t検定	7	31.80%
ノンパラメトリック	6	27.30%
相関分析	3	13.60%
分散分析	1	4.50%
ロジスティック回帰	1	4.50%
共分散構造分析	1	4.50%
χ^2 検定	1	4.50%

図⑩-2-10 分析方法の件数（N=22）



⑩ - 3 対象者属性の傾向

⑩ - 3 - 1 平均年齢

平均年齢の傾向として、記載のあった研究の24件のうち平均年齢は80.163歳であり、標準偏差は5.3391歳である。最大値は98.0歳、最小値は71.0歳となっている。

表⑩ -3-1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
アクティビティ	80.163	24	5.3391	71.0	98.0

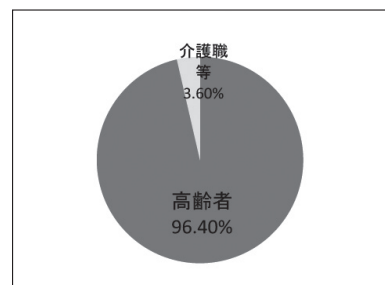
⑩ - 3 - 2 対象者属性の傾向

対象者属性について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く27件(96.4%)となっており、ほとんどが高齢者を対象者としている。次いで、「介護職等」が1件(3.6%)となっており、他の対象者はなかった。

表⑩ -3-2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	27	0	1	0	0	28
割合	96.40%	0.00%	3.60%	0.00%	0.00%	100.00%

図⑩ -3-2 対象者属性



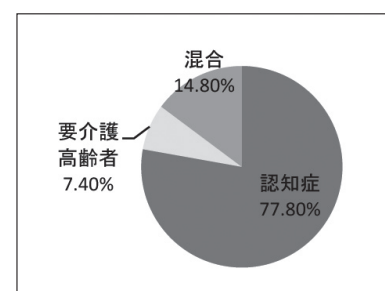
⑩ - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者の27件の中で、その内訳は、「認知症」が最も多く21件(77.8%)であり、3/4を超える高齢者属性が認知症である。次いで「混合」が4件で14.8%、さらに「要介護高齢者」が2件(7.4%)となっている。他の高齢者の属性はなかった。

表⑩ -3-3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	21	2	0	4	27
割合	77.80%	7.40%	0.00%	14.80%	100.00%

図⑩ -3-3 高齢者属性



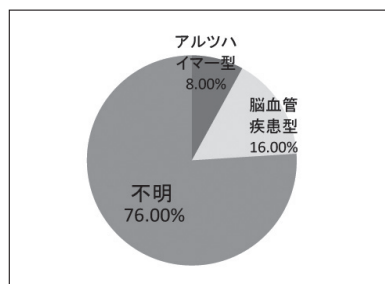
⑩ - 3 - 4 認知症種類の傾向

認知症の種類について、「不明」が19件、76.0%であり、「脳血管疾患型」が4件(16.0%)であり、「アルツハイマー型」は2件(8.0%)であった。

表⑩ -3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	2	4	0	0	19	0	25
割合	8.00%	16.00%	0.00%	0.00%	76.00%	0.00%	100.00%

図⑩ -3-4 認知症種類



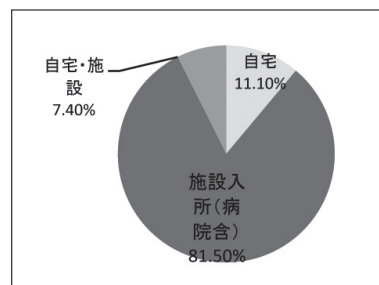
⑩ - 3 - 5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が22件であり、81.5%となっており、全体の8割以上が「施設入所(病院含)」である。次いで「自宅」が3件(11.1%)であり、「自宅・施設」が2件で7.4%であった。

表⑩ -3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	3	22	0	2	0	27
割合	11.10%	81.50%	0.00%	7.40%	0.00%	100.00%

図⑩ -3-5 所在



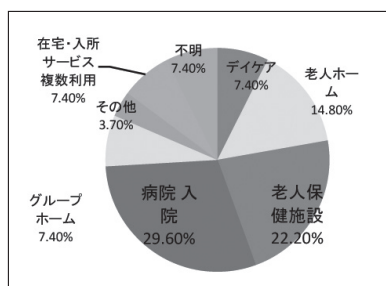
⑩-3-6 利用サービスの傾向

利用サービスについての傾向は、「病院入院」が8件であり、29.6%であった。次いで「老人保健施設」が6件(22.2%)、「老人ホーム」が4件(14.8%)となっている。

表⑩-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院	
件数	0	0	2	0	4	6	8	
割合	0.00%	0.00%	7.40%	0.00%	14.80%	22.20%	29.60%	
	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス 複数利用	在宅系サービス 複数利用	入所・在宅系サ ビス複数利用	不明	合計
	2	1	0	0	0	2	2	27
	7.40%	3.70%	0.00%	0.00%	0.00%	7.40%	7.40%	100.00%

図⑩-3-6 利用サービス



⑩-3-7 職員種別の傾向

職員種別については記載のあった研究は1件のみで「介護・看護職」だけであり、他の記載はなかった。

表⑩-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	0	0	0	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	介護・看護職	複数職種	合計				
	1	0	1				
	100.00%	0.00%	100.00%				

図⑩-3-7 職員種別



⑪ リスクマネジメント

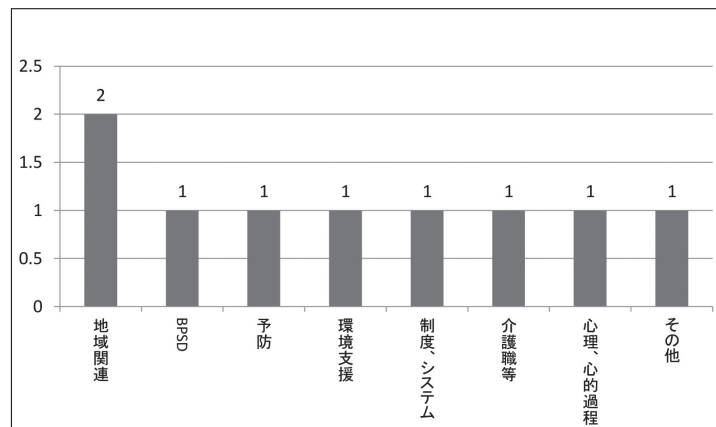
⑪-1 他の研究内容との重複

リスクマネジメントに関連する研究10件のうち重複している研究内容では、「地域関連」の研究が最も多く、2件(20.0%)となっており、次いで「BPSD」、「予防」、「環境支援」、「制度、システム」、「介護職員」、「心理、心的過程」、「その他」に関連する研究がそれぞれ1件(10.0%)となっている。

表⑪-1 他の研究内容との重複件数 (N=10)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
地域関連	2	20.00%
BPSD	1	10.00%
予防	1	10.00%
環境支援	1	10.00%
制度、システム	1	10.00%
介護職等	1	10.00%
心理、心的過程	1	10.00%
その他	1	10.00%

図⑪-1 他の研究内容との重複状況 (N=10)



⑪-2 研究方法の傾向

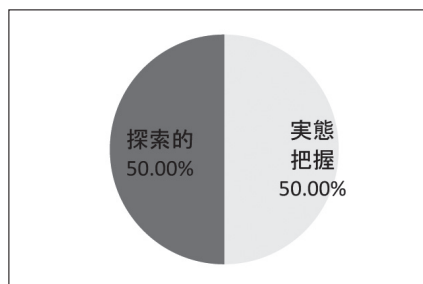
⑪-2-1 研究タイプ1の傾向

リスクマネジメントに関する研究10件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「実態把握研究」、「探索的研究」がそれぞれ5件(50.0%)であり、両者とも拮抗している。

表⑪-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	5	50.00%
探索的	5	50.00%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	10	100.00%

図⑪-2-1 研究タイプ1



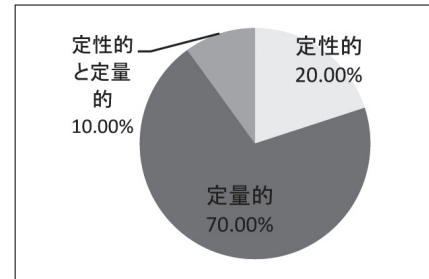
⑪-2-2 研究タイプ2の傾向

リスクマネジメントに関する研究10件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が7件(70.0%)であり全体の7割となっている。次いで「定性的研究」が2件(20.0%)となっており、「定性的と定量的研究」は1件(10.0%)であった。

表⑪-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	2	20.00%
定量的	7	70.00%
定性的と定量的	1	10.00%
合計	10	100.00%

図⑪-2-2 研究タイプ2



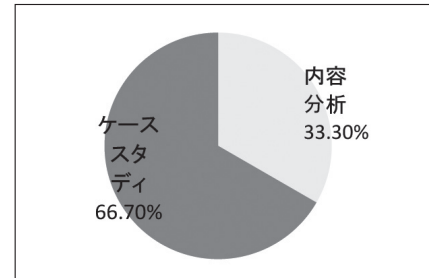
⑪-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の3件のうち、その研究種類は「ケーススタディ」が2件(66.7%)で最も多く、次いで「内容分析」が1件(33.3%)となっており、他の種類はなかった。

表⑪-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	1	33.30%
会話分析	0	0.00%
エスノメソドロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	0	0.00%
ケーススタディ	2	66.70%
その他	0	0.00%
合計	3	100.00%

図⑪-2-3 定性的研究の種類



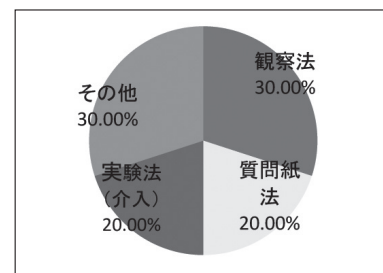
⑪-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、「観察法」、「その他」がともに3件で30.0%となっており、次いで「質問紙法」、「実験法(介入)」がともに2件(20.0%)となっている。

表⑪-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	3	30.00%
面接法	0	0.00%
質問紙法	2	20.00%
実験法(介入)	2	20.00%
その他	3	30.00%
観察法と面接法	0	0.00%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	10	100.00%

図⑪-2-4 研究方法



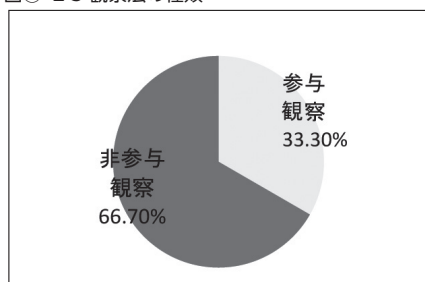
⑪-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、観察法3件のうち最も多いのは「非参与観察」であり、2件(66.7%)となっている。「参与観察」は1件(33.3%)である。

表⑪-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	1	33.30%
非参与観察	2	66.70%
その他	0	0.00%
合計	3	100.00%

図⑪-2-5 観察法の種類



⑪-2-6 面接法の種類

面接法の種類について、研究方法として面接法を用いた研究がなかったため、種類の結果は得られなかった。

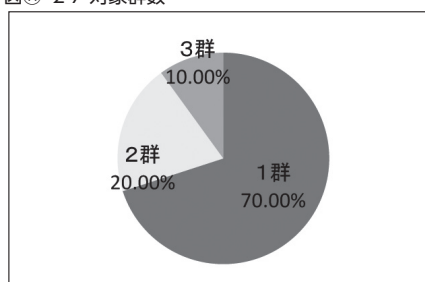
⑪-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」であり7件(70.0%)であり、次いで「2群」が高く、2件(20.0%)であった。さらに「3群」が1件(10.0%)であった。

表⑪-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	7	70.00%
2群	2	20.00%
3群	1	10.00%
4群	0	0.00%
合計	10	100.00%

図⑪-2-7 対象群数



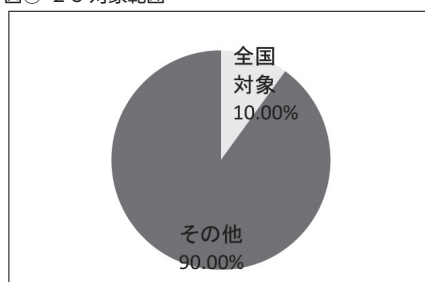
⑪-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、10件の中で「全国対象」は1件のみ10.0%であり、「その他」が9件で90.0%であり、多くを占めている。

表⑪-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	1	10.00%
その他	9	90.00%
合計	10	100.00%

図⑪-2-8 対象範囲



⑪-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

リスクマネジメントの研究において、実施期間の平均は8件中718.63日であり、研究地域数の平均は8件中1.25地域であった。事業所数の平均は7件中2.14事業所であり、対象者人数の平均は10件中152.20人であった。

表⑪-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間 (日)	8	5	3240	718.63	1117.149
研究地域数	8	1	2	1.25	0.463
事業所数	7	1	9	2.14	3.024
対象者人数 (人)	10	1	702	152.2	211.905

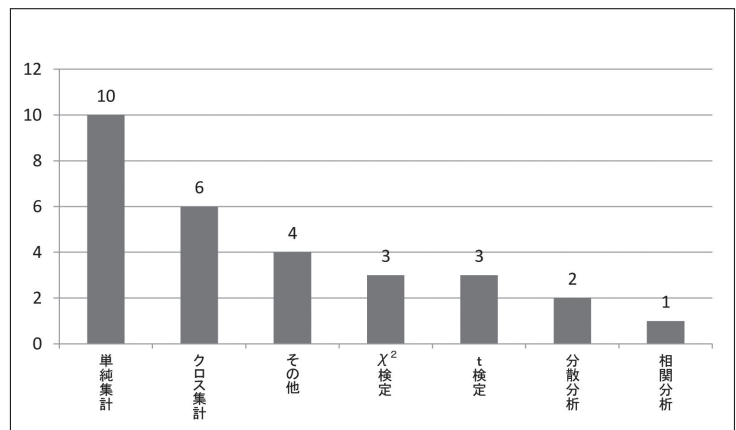
⑪-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が10件であり、全ての研究に用いられている。次いで「クロス集計」が6件、60.00%であり、さらに「その他」が4件で40.0%、「 χ^2 検定」、「t検定」がともに3件で30.0%、「分散分析」が2件で20.0%と続いている。

表⑪-2-10 分析方法の件数 (N=10)

分析方法分類	件数	重複割合 (%)
単純集計	10	100.0%
クロス集計	6	60.0%
その他	4	40.0%
χ^2 検定	3	30.0%
t検定	3	30.0%
分散分析	2	20.0%
相関分析	1	10.0%

図⑪-2-10 分析方法の件数 (N=10)



⑪-3 対象者属性の傾向

⑪-3-1 平均年齢

平均年齢の傾向としては、11件の対象者の平均年齢は70.765歳であり、標準偏差は21.6649歳である。最大値は92.0歳、最小値は23.6歳となっている。

表⑪-3-1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
リスクマネジメント	70.765	11	21.6649	23.6	92.0

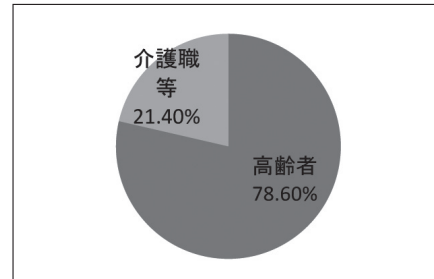
⑪-3-2 対象者属性の傾向

対象者属性について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く11件(78.6%)となっており、全体の8割近くが高齢者を対象者としている。次いで、「介護職等」が3件(21.4%)となっており、他の対象者はなかった。

表⑪-3-2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	11	0	3	0	0	14
割合	78.60%	0.00%	21.40%	0.00%	0.00%	100.00%

図⑪-3-2 対象者属性



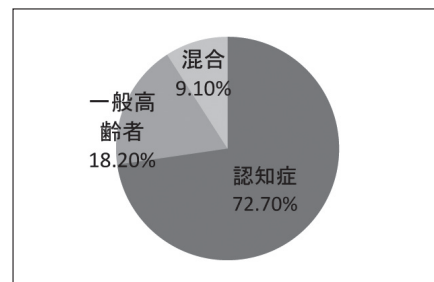
⑪-3-3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者の11件の中で、その内訳は、「認知症」が最も多く8件(72.7%)であり、次いで「一般高齢者」が2件で18.2%、さらに「混合」が1件(9.1%)となっている。他の高齢者の属性はなかった。

表⑪-3-3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	8	0	2	1	11
割合	72.70%	0.00%	18.20%	9.10%	100.00%

図⑪-3-3 高齢者属性



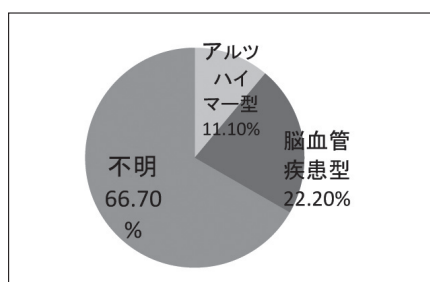
⑪-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類について、「不明」が6件、66.7%であり、「脳血管疾患型」が2件(22.2%)であり、「アルツハイマー型」は1件(11.1%)であった。

表⑪-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型(ピック)	不明	その他	合計
件数	1	2	0	0	6	0	9
割合	11.10%	22.20%	0.00%	0.00%	66.70%	0.00%	100.00%

図⑪-3-4 認知症種類



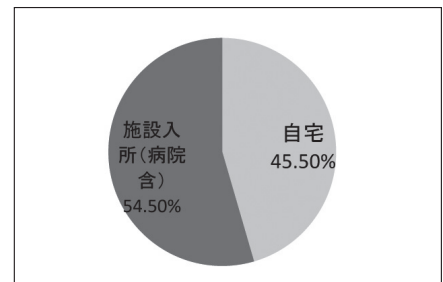
⑪-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が6件であり、54.5%となっており、全体の半数以上が「施設入所(病院含)」である。次いで「自宅」が5件(45.5%)であった。

表⑪-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	5	6	0	0	0	11
割合	45.50%	54.50%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%

図⑪-3-5 所在



⑪-3-6 利用サービスの傾向

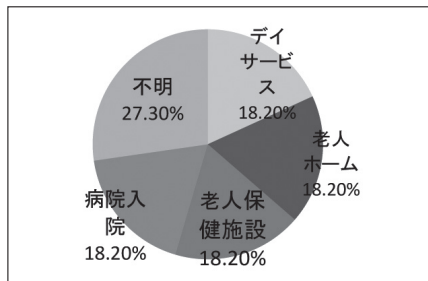
利用サービスについての傾向は、「不明」が3件であり、27.3%であった。次いで「デイサービス」、「老人ホーム」、「老人保健施設」、「病院入院」がそれぞれ2件(18.2%)となっている。

表⑪-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院
件数	0	2	0	0	2	2	2
割合	0.00%	18.20%	0.00%	0.00%	18.20%	18.20%	18.20%

	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス 複数利用	在宅系サービス 複数利用	入所・在宅系サービス 複数利用	不明	合計
件数	0	0	0	0	0	0	3	11
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	27.30%	100.00%

図⑪-3-6 利用サービス



⑪-3-7 職員種別の傾向

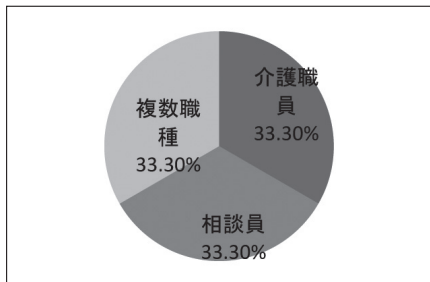
職員種別については「介護職員」、「相談員」、「複数職種」がそれぞれ1件ずつで、それぞれ33.3%であった。他の職員種別はなかった。

表⑪-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	1	0	0	0	1	0	0
割合	33.30%	0.00%	0.00%	0.00%	33.30%	0.00%	0.00%

介護・看護職	複数職種	合計
0	1	3
0.00%	33.30%	100.00%

図⑪-3-7 職員種別



⑫環境支援

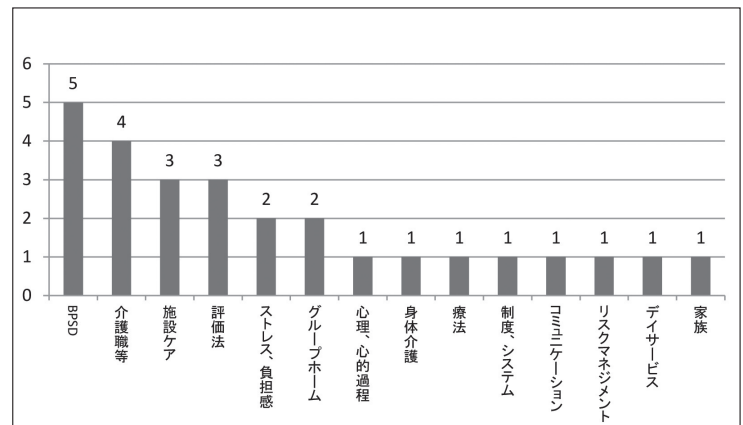
⑫-1 他の研究内容との重複

環境支援に関連する研究70件のうち重複している研究内容では、「BPSD」の研究が最も多く、5件(7.1%)となっており、次いで「介護職等」が4件(5.7%)、「施設ケア」、「評価法」がともに3件(4.3%)、「ストレス、負担感」、「グループホーム」がともに2件(2.9%)となっている。

表⑫-1 他の研究内容との重複件数 (N=70)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
BPSD	5	7.10%
介護職等	4	5.70%
施設ケア	3	4.30%
評価法	3	4.30%
ストレス、負担感	2	2.90%
グループホーム	2	2.90%
心理、心的過程	1	1.40%
身体介護	1	1.40%
療法	1	1.40%
制度、システム	1	1.40%
コミュニケーション	1	1.40%
リスクマネジメント	1	1.40%
デイサービス	1	1.40%
家族	1	1.40%

図⑫-1 他の研究内容との重複状況 (N=70)



⑫-2 研究方法の傾向

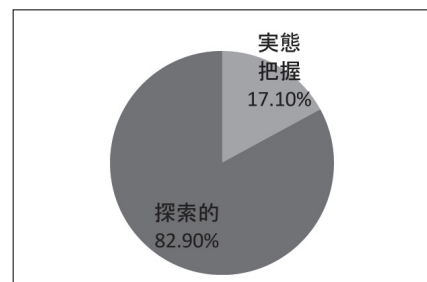
⑫-2-1 研究タイプ1の傾向

環境支援に関する研究70件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「探索的研究」が58件(82.9%)であり、全体の8割を超えている。「実態把握研究」は12件(17.1%)となっている。

表⑫-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	12	17.10%
探索的	58	82.90%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	70	100.00%

図⑫-2-1 研究タイプ1



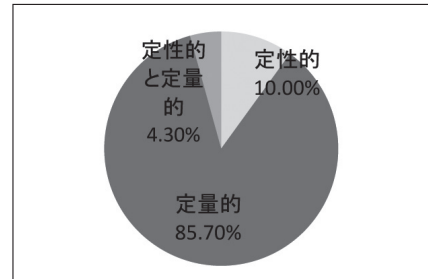
⑫-2-2 研究タイプ2の傾向

環境支援に関する研究70件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が60件(85.7%)であり、全体の8割を超えている。次いで「定性的な研究」が7件(10.0%)となっており、「定性的と定量的研究」は3件(4.3%)であった。

表⑫-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	7	10.00%
定量的	60	85.70%
定性的と定量的	3	4.30%
合計	70	100.00%

図⑫-2-2 研究タイプ2



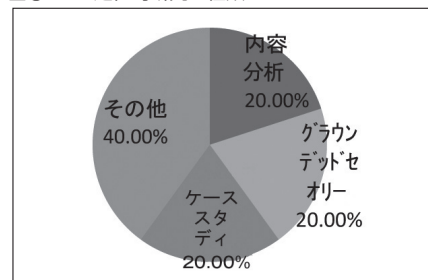
⑫-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の10件のうち、その研究種類は「その他」が4件(40.0%)で最も多く、次いで「内容分析」、「グラウンデッドセオリー」、「ケーススタディ」がそれぞれ2件(20.0%)、となっており、他の種類はなかった。

表⑫-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	2	20.00%
会話分析	0	0.00%
エスノメソロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	2	20.00%
ケーススタディ	2	20.00%
その他	4	40.00%
合計	10	100.00%

図⑫-2-3 定性的研究の種類



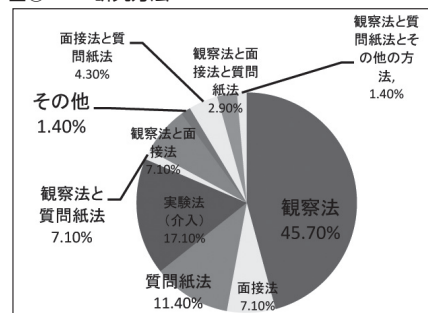
⑫-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、「観察法」が32件で45.7%となっており、半数近くが「観察法」となっている。次いで「実験法(介入)」が12件で17.1%となっており、続いて「質問紙法」が8件(11.4%)、「面接法」、「観察法と面接法」がともに5件(7.1%)となっている。

表⑫-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	32	45.70%
面接法	5	7.10%
質問紙法	8	11.40%
実験法(介入)	12	17.10%
その他	1	1.40%
観察法と面接法	5	7.10%
観察法と質問紙法	1	1.40%
面接法と質問紙法	3	4.30%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	2	2.90%
観察法と質問紙法とその他の方法	1	1.40%
合計	70	100.00%

図⑫-2-4 研究方法



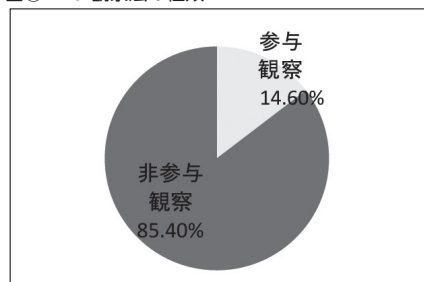
⑫-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、観察法を用いた研究41件のうち最も多いのは「非参与観察」であり、35件(85.4%)であり、多くが「非参与観察」となっている。「参与観察」は6件(14.6%)ある。

表⑫-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	6	14.60%
非参与観察	35	85.40%
その他	0	0.00%
合計	41	100.00%

図⑫-2-5 観察法の種類



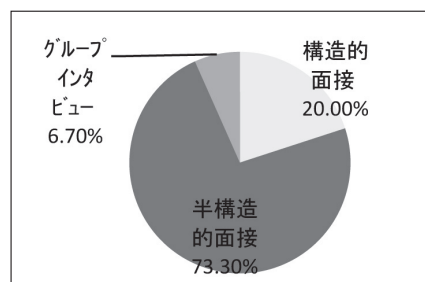
⑫-2-6 面接法の種類

面接法の種類について、面接法を用いた研究15件のうち、「半構造的面接」が最も多く、11件(73.3%)となっている。次いで、「構造的面接」が3件(20.0%)であり、「グループインタビュー」が1件(6.7%)となっている。

表⑫-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	3	20.00%
半構造的面接	11	73.30%
グループインタビュー	1	6.70%
その他	0	0.00%
合計	15	100.00%

図⑫-2-6 観察法の種類



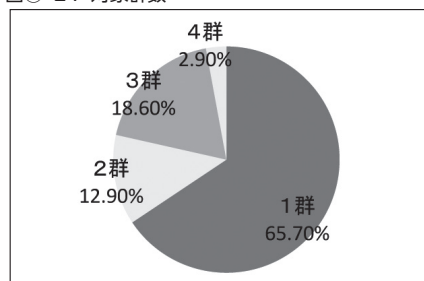
⑫-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」であり46件(65.7%)であり、次いで「3群」が高く、13件(18.6%)であった。さらに「2群」が9件(12.9%)、「4群」が2件(2.9%)であった。

表⑫-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	46	65.70%
2群	9	12.90%
3群	13	18.60%
4群	2	2.90%
合計	70	100.00%

図⑫-2-7 対象群数



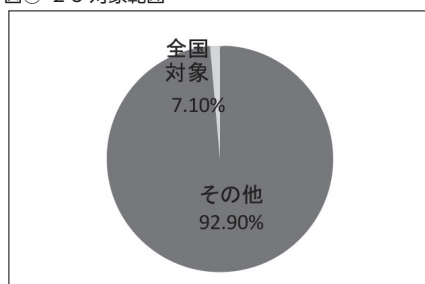
⑫-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、70件の中で「全国対象」は5件のみ7.1%であり、「その他」が65件で92.9%であり、「その他」が多くを占めている。

表⑫-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	5	7.10%
その他	65	92.90%
合計	70	100.00%

図⑫-2-8 対象範囲



⑫-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

環境支援の研究において、実施期間の平均は48件中70.77日であり、研究地域数の平均は48件中2.31地域であった。事業所数の平均は61件中31.93事業所であり、対象者人数の平均は70件中92.51人であった。

表⑫-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間 (日)	48	2	540	70.77	100.071
研究地域数	48	1	47	2.31	6.643
事業所数	61	1	583	31.93	104.811
対象者人数 (人)	70	2	781	92.51	161.131

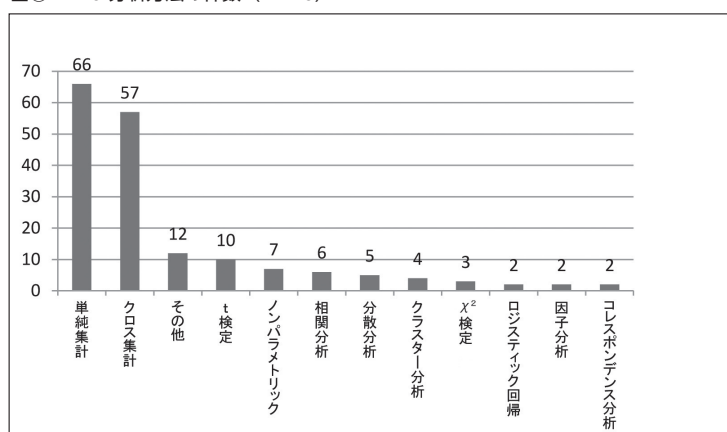
⑫-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が66件であり、94.3%である。次いで「クロス集計」が57件、81.4%であり、さらに「その他」が12件で17.1%、「t検定」が10件で14.3%、「ノンパラメトリック」が7件で10.0%と続いている。

表⑫-2-10 分析方法の件数 (N=70)

	件数	重複割合 (%)
単純集計	66	94.30%
クロス集計	57	81.40%
その他	12	17.10%
t検定	10	14.30%
ノンパラメトリック	7	10.00%
相関分析	6	8.60%
分散分析	5	7.10%
クラスター分析	4	5.70%
χ^2 検定	3	4.30%
ロジスティック回帰	2	2.90%
因子分析	2	2.90%
コレスポンデンス分析	2	2.90%

図⑫-2-10 分析方法の件数 (N=70)



⑫ - 3 対象者属性の傾向

⑫ - 3 - 1 平均年齢

平均年齢の傾向としては、69件の対象者の平均年齢は69.116歳であり、標準偏差は21.5817歳である。最大値は87.8歳、最小値は21.0歳となっている。

表⑫ - 3 - 1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
環境支援	69.116	69	21.5817	21.0	87.8

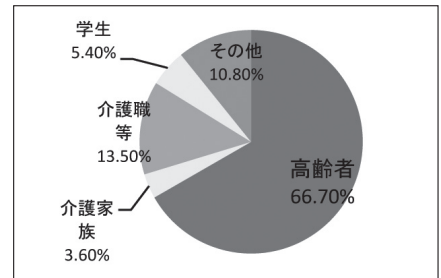
⑫ - 3 - 2 対象者属性の傾向

対象者属性について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く74件(66.7%)となっており、全体の2/3近くが高齢者を対象者としている。次いで、「介護職等」が15件(13.5%)となっており、「その他」が12件(10.8%)、「学生」が6件(5.4%)、「介護家族」が4件(3.6%)となっている。

表⑫ - 3 - 2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	74	4	15	6	12	111
割合	66.70%	3.60%	13.50%	5.40%	10.80%	100.00%

図⑫ - 3 - 2 対象者属性



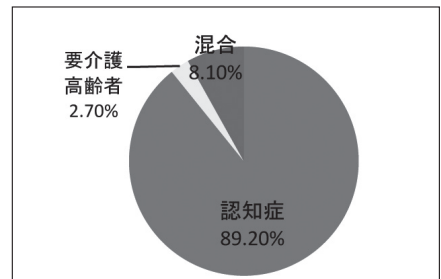
⑫ - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者の74件の中で、その内訳は、「認知症」が最も多く66件(89.2%)であり、多くが「認知症」が高齢者の属性となっている。次いで「混合」が6件で8.1%、さらに「要介護高齢者」が2件(2.7%)となっている。他の高齢者の属性はなかった。

表⑫ - 3 - 3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	66	2	0	6	74
割合	89.20%	2.70%	0.00%	8.10%	100.00%

図⑫ - 3 - 3 高齢者属性



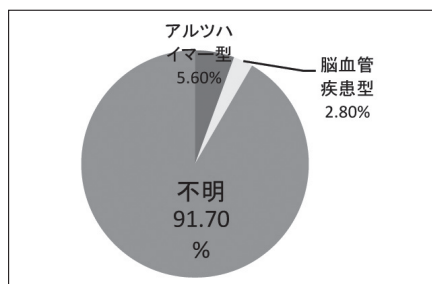
⑫-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類について、「不明」が66件、91.7%であり、「アルツハイマー型」が4件(5.6%)であり、「脳血管疾患型」は2件(2.8%)であった。

表⑫-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	4	2	0	0	66	0	72
割合	5.60%	2.80%	0.00%	0.00%	91.70%	0.00%	100.00%

図⑫-3-4 認知症種類



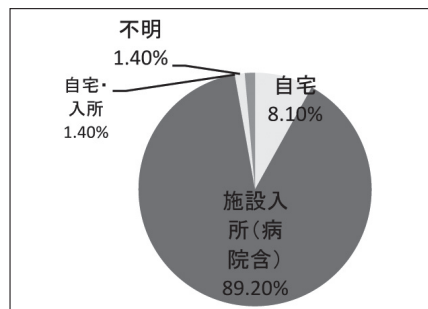
⑫-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が66件で、89.2%となっており、全体の9割近くが「施設入所(病院含)」である。次いで「自宅」が6件(8.1%)、「自宅・施設」、「不明」がともに1件(1.4%)であった。

表⑫-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	6	66	0	1	1	74
割合	8.10%	89.20%	0.00%	1.40%	1.40%	100.00%

図⑫-3-5 所在



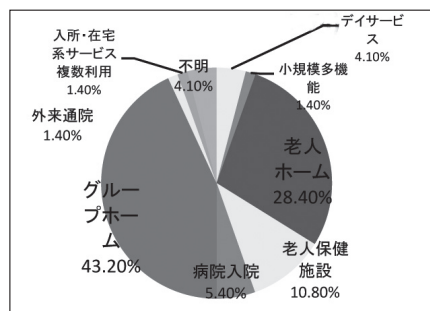
⑫-3-6 利用サービスの傾向

利用サービスについての傾向は、「グループホーム」が32件であり、43.2%であった。次いで「老人ホーム」が21件(28.4%)、「老人保健施設」が8件(10.8%)となっている。

表⑫-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院	
件数	0	3	0	1	21	8	4	
割合	0.00%	4.10%	0.00%	1.40%	28.40%	10.80%	5.40%	
	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス 複数利用	在宅系サービス 複数利用	入所・在宅系サー ビス複数利用	不明	合計
	32	0	1	0	0	1	3	74
	43.20%	0.00%	1.40%	0.00%	0.00%	1.40%	4.10%	100.00%

図⑫-3-6 利用サービス



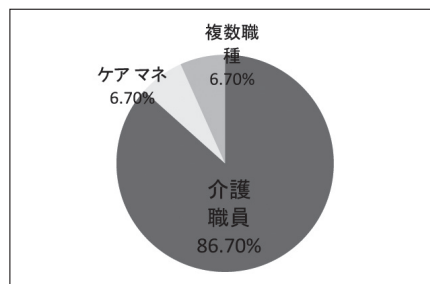
⑫-3-7 職員種別の傾向

職員種別については「介護職員」が最も多く13件(86.7%)であり、「ケアマネ」、「複数職種」がそれぞれ1件ずつで6.7%であった。他の職員種別はなかった。

表⑫-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	13	1	0	0	0	0	0
割合	86.70%	6.70%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	介護・看護職	複数職種	合計				
	0	1	15				
	0.00%	6.70%	100.00%				

図⑫-3-7 職員種別



⑫-3-8 学生種別の傾向

学生種別は6件全てが「大学生」のみで、他の種別はなかった。

表⑫-3-8 学生種別

	大学生	専門学校・ 短大生	高校生	中学生	小学生	その他	合計
件数	6	0	0	0	0	0	6
割合	100.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%

図⑫-3-8 学生種別

